

竹林の手入れに参加して

富山市婦中町 宮田のぶ子

▼私が生まれたところは、谷あいの小さな集落です。▼小さい頃は、山や川が遊び場で、春は木苺、夏は桑の実やグミ、秋は山葡萄・栗等が近くの山で沢山取れ、自然の中で伸び伸びと育ったこともあって、童心に帰る富山の森を守る活動に参加いたしました。▼しかし、私の見た里山は、竹が密生し、雑木林の林内へほとんど広がる竹藪は、中が暗いだけでなく、折れたり枯れたりした竹が重なりあった、すくすく荒れた状態でした。弾んでいた気持ちは、どこかへいつてしまいました。このまま放置すると、山全体が竹林で覆われ、どんぐり等の雑木林はなくなってしまうそうです。▼本来の里山には、小動物等色々な生き物が共生していました。今のうちにき



昨年に引き続き、呉羽丘陵の荒れた竹林の整理に汗を流す

ちんと手入れを行えば、昔のように人も含めた生き物が共生できる環境が戻ってくると思います。▼また、大きくて明るくきれいな林の中は、精神的にリラックスでき、心が癒され果として利用できるような森づくり。子供たちの声が響き渡るような遊びの場。そのような森にこそが再生できたらいいな……。▼竹を伐るのは危険も伴うし、暑くて大変な作業でしたが、一汗かいた後はとても気持ちが良い、胸が膨らみました。▼きんたろう倶楽部での活動は私のレクリエーション活動としてとらえ、その一役を担っていたと思っています。そして、自然との関わりの中で、これからも沢山の感動やときめきが期待できそうです。

森づくりの仕事に参加して

富山市下新町 江連俊克

▼7月2日(日)、生憎の雨降り。今日きんたろう倶楽部のボランティアとして、富山市山田赤目谷で行われる「KORORの森」の整備に参加する。倶楽部のメンバーは何人参加するか分からなかったが、自分が入会申し込みをしたときから興味を持っていたので、ぜひ参加したいと思い妻と出かけた。▼集会所には総勢約百名余りのボランティアが集まっていた。挨拶や注意事項を聞いた後、整備予定地に移動し、それぞれに指定された場所の下草刈りをした。▼最初の場所は割合に楽であったが、次の場所に移ると、ここが大変な処であった。昨年ボランティアの方々



雨の中、在来植生の林を夢見てKORORの森の草を刈る

が植樹された苗木の周りは、草が我々の腰位まで伸びており、掻き分けながら苗木に陽が当たるように草刈鎌で刈取りを繰り返した。▼また、苗木の所在が分かるようにと立てられた支柱の竹は、この冬の雪で6割以上が折れたり倒れたりしていたので、補修や交換の作業も行った。▼1時間半ほどの作業を行い、終了の合図があったときは、全身、雨と汗でずぶ濡れであった。▼解散後は、頂いた入浴券で近くの牛岳温泉センターに行き汗を流した。つらい作業ではあったが、やり終えたという満足感が湯船につかった体に広がっていた。▼これからの里山はどうあるべきかを考えたとき、まず何故、里山里山と言われるようになったのだらうと思いつくと、山に動物の餌となる植物が少なくなったことが騒がれてからではないだろうか。そこで餌となる樹木を植えようということになったと思う。▼これからは植えるだけでなく、こまめな手入れをし、樹木の成長を促し、将来的に人間と動物が共生できる森とすることだと湯に浸り思った次第である。

初夏のクマ

▼七月に入り、マスコミからクマの問い合わせが増えた。▼「魚津のインター付近にクマが出ました」「高岡の雨晴海岸まで四百mしかありません」「伏木にも出ました」▼そのたびに「何でなんですか」と聞かれる。▼一昨年に起きたクマの大量出没と人身事故以来、人里近くに現れるクマへの関心は高い。▼山に何が起きているのか。市民の漠然とした不安を背景にしているからだろう。▼初夏のクマ出没が、一昨年の大量出没につながるものではない。あれは冬眠前に山に餌がなかったクマたちが飢えて山から出てきたものだ。▼初夏は仔グマにして自立の季節。1年半余り母グマと暮らした仔グマが未知の世界に独りぼっちで歩み出す試練の時だ。▼この時期は「恋の季節」でもある。クマはなわばりを持たない動物。オスはメスを求めて広い範囲を動き回る。木の実やスズクエなど、まとまった餌も採りにくい時期でもある。山の餌を求めてクマは動く。▼人が去り、放置された里山は既にクマたちの生息域。その地域でこの時期の、こうしたクマの動きが人目についていると考えられる。▼インターや雨晴海岸に出たことに人はびびりだが、クマにとってみれば放置された森や林を伝えればどうってことない距離だ。▼ただ問題は、そんな場所でもクマとニアミスをしたり、共存することはできないことだ。人とクマとの新たな境界帯づくり、交通整理が必要だ。

里山への想いの重さ

▼さて、四月二十三日にオーバードホールで結成されたきんたろう倶楽部。たくさんの方の思いが集まってきた。▼登録される人の輪は六百六十人を超えた。市民の皆さんの里山への関心の深さが窺い知れる。▼しかし、誰もが感じていることだろうが植樹や草刈りのイベントやボランティア活動だけでは里山は再生できない。きんたろう倶楽部では持続的に人が山に関わる仕組みづくりを考えているが、まだまだ模索の状態だ。

里山の再生とは、里山の新しい活用形態や方法を編み出すこと。それは「里山の新生」にほかならない。

▼明確なことは、昔の里山の再現は不可能だという点だ。里山に人がいないからだ。山に関わりそこで生活する人の営みがないからだ。▼では里山の再生とはなにか。▼私はこれからの里山の新しい活用形態や方法を編み出すことだと思う。『里山の新生』にほかならない。

里山を活用し、人の持つ自然性の復権を

▼里山は多くの人が関わる生業の場だった。それに変わる活用の仕方がいま問われている。▼里山にはまず人がいなければならない。山を相手にした労働の場でなくとも。▼通つ。集つ。体験する。関わる。住む。山

を、森を理解する様々の形態が考えられるだろう。▼己を感じる場、行為する場としての里山の活用、それが総じて森づくりにつながっていく。▼感じていることがある。▼現代人が急速に喪失してきたもの、それは自然との関わり。▼現代人が急速に獲得したもの、それは都市化と都市生活。人為の世界の拡大。人の生き様は人為性の自己増殖の渦中にある。▼しかし、人は自然との関わりの中で自然を己れに取り込み、生きてきた。自然は相対するものではない。人の中に生きているもの。▼生き

森に通わば道は開けん

▼私たちが森に関わり最初に得るものは、自然を身に受ける快適さや満足といった心の充足だ。そして手入れして得る森からの恵み。間伐材や竹も、やりようによつては有用な資源として甦るはず。▼そして里山の空間は人の生きる価値を創造できる場だ。森の学校・コンサート・散策・フェスティバル・衣食住や文化、歴史に関する集いなど。▼人が集い、森に人に働きかける。やがて森には道が通じ、森が開かれる。こうして森をめぐり、人やものの地域的循環が回復すれば、新しい里山の文化が受け継がれていくだろう。▼森は簡単には変わっていくれない。五十年、百年単位の長期的な視野がいる。しかしそれをやろう。未来の子どものために。



(文章と写真・山本茂行) きんたろう倶楽部副会長

を、森を理解する様々の形態が考えられるだろう。▼己を感じる場、行為する場としての里山の活用、それが総じて森づくりにつながっていく。▼感じていることがある。▼現代人が急速に喪失してきたもの、それは自然との関わり。▼現代人が急速に獲得したもの、それは都市化と都市生活。人為の世界の拡大。人の生き様は人為性の自己増殖の渦中にある。▼しかし、人は自然との関わりの中で自然を己れに取り込み、生きてきた。自然は相対するものではない。人の中に生きているもの。▼生き



事務局より

きんたろう倶楽部では、作業と平行して森を学べる養成講座も開催しています。ぜひ、ご参加ください。

【ちから】一人ひとりの力の集合

【わざ】森を整備するテクニック

倶楽部は求めています

【ちえ】経験をちえに生かす

【しきん】情報提供にも資金が必要

きんたろう倶楽部「森・人づくり」年間計画表

Table with 3 columns: 日程 (Date), 講座名 (Lecture Name), 目的 (Objective). It lists various activities and lectures throughout the year 2006 and 2007.

※とやまの森づくりサポートセンター主催事業

2006年4月23日 きんたろう倶楽部結成 7月の会員数:660名

きんたろう倶楽部通信

2号

2006年7月31日発行 きんたろう倶楽部事務局 〒930-0151 富山市古沢254番地 富山市ファミリーパーク内 TEL&FAX:076-434-1316 URL:http://kintaroclub.net E-mail:info@kintaroclub.net

人びとが暮らすために必要な森づくり。子どもたちがのびのび育つために必要な森づくり。それにはあなたの力が必要です。自然の恵み豊かな富山の里山を、いっしょに創りませんか。